

會



報

1961年2月

213

日本山岳会

新春の反省

松方三郎

年が改まったからといって、こんなことをいふ出すのではないが日本の山登りも、このあたりで足もとをよく見直してみることが、意味があるのではないだろうか。ヒマラヤ遠征も結構、アンデスも大いによいと思うが、お膝元の日本の山では遭難が続出というこゝとでは、自分のうちの台所の始末をおろそかにして、遠く走りばかりしているように見られないとは限らない。

なにもこれは、世間体を気にしていつているのでもなければ、味噌もくそもいっしょくたにして俗流に同じでいつているわけでもない。谷川で遭難が絶えないからといってヒマラヤ遠征を断念するのはおかしい話だし、それとこれとが違ふことくらいはいわれないで、もわかつているのだ。しかしながら、今日の日本の登山界には、何か基本的なところで欠けているものがあるのではないか、そしてそのことが時々所によっては遭難をまねくことになったり、また、やたらに山をきたなくすることの原因となつてゐるのではないか、そんな気もするのである。

登山は、自然崇拜とはいえないにしても、少くとも、自然愛好の心持ちから出発して発展してきたスポーツだ。ぼくたちの時代の者はそうした道をたどつて来たのだし、それが本筋だと思つていた。だから、山を大切にすること、これは登山入門の第一課にあつたわけだ。山を大切にすること、それは、別のことばでいえば、山をおそれ、冬山に入つた初めのころは、事実、冬山に入つた初めのころは、今からすればおかしいくらいに緊張もしてゐたわけだ。

しかし、もし登山を最初から単なる一つのスポーツとして受け入れたとすると、事情は大分違つてくるに相違ない。登山の行動そのものとしては、どっちも山に登つていくのだから、外からみたのではこの区別がつかない。区別がつかないから同じだと思つてゐると、あたり近所にジュースの空缶をちらかしていつたり、大胆不敵さに度胆をぬくような勇士が現れたりするのである。

これには、しかし、戦争で敗れたことも関係がないとはいえない。戦争に敗れたあとでの一般の風潮は、ありとあらゆる権威の無視、無視という一点にしぼられ、こうした空気の中で何年かがすぎ、その中で戦後の世代が育つてきた。今日ではいかに天皇制打倒をさけんでも、憲兵につかまるおそれはない。内閣の首班だなどといつてもそれだけでは一文の値打もない。無視し軽視したからといって、その日の暮しにさしつかへはない。両親も、学校の先生もおそろるに足らず、ということになった。

昔は「地震・雷・火事・おやじ」といったものだ。自然のおそろしさに対し人間社会の権威の代表として「おやじ」が挙げられていたわけだ。しかし今日ではおやじをふくめて、すべての人間社会の権威を認めないということになった。人民が主権者である今日、人間社会の権威は自分達の以外には認めないという考え方は、理窟の当否はとにかく、その考え方のために身を危険にさらすという心配はないから、天下におそろるものなしということになるわけだ。

ところで問題は、山の世界は人間の社会とは少々違うということだ。つまり「地震・雷」の方に属しているの「おやじ」の方の力、テグリーに入らない。だからおやじをやつた勢に乗じて、地震も雷も、山も雪崩もついでにやつけたと思つてゐると、とんでもない仕返しをうけることになるのだ。天皇制は打倒しうるが、山は打倒しえない。打倒したと一きめにするのは結構だが、山の方はそんなことでは黙りもしなければ引っこみもしない。だから、何かというときみじめな敗北ということになるのだ。そして遭難は一口にいえばその敗北なのだ。もちろん山を軽んじていなくても、場合によつては同じように敗北するのであるが、頭からそのおそろしさを無視し否定してかかれれば、一層その結果はさんたんたるものになるに相違ない。

山をおそれぬということは、山に対して不遜であるということだ。そうした心の持ち方が山の頂上などをゴミ溜めのようにすることにも通ずるのだ。

こんなことを考えると、もう一度、日本の山登りは五十年前以前にかえつて、出直してもいいのではないか、というのが、ぼくの考えなのである。

兄等、もつて如何となす？

× ×

会費未納の方は至急お払込下さい (振替東京四八二九)

高山水長

“山高く、水長し”

デジ刻は冠松次郎氏

AACK

三十年の回顧

今西錦司

AACKは去る十二月十八日に創立三十周年祝賀会を挙行した。当日はJACを代表して、三田副会長が出席され、御祝辞をいただいた。AACKの光栄とするところである。記念事業の一つとして三十年史を編もうという案もないわけではなかったが、実行に移せなかった。私は創立者の一人だから、ここでは思い出をつづることによって、AACK三十年の略史にかえたい。

関西学生山岳連盟の方がAACKよりも創立が古い。私はすでに

大学を出て入管中だったので、高橋健治が主として、その結成にあたった。高橋は大学を出るとスイスへ行った。伊藤憲がパウアーの「ヒマラヤに挑戦して」を訳したその第一章は「決心」であつた。われわれもヒマラヤへゆく決心をした。そのために学連とは別個に同志の結合をはかる必要を感じたわれわれはもはや学生でなくOBだったからである。かくして京大卒業生を中心としたAACK（京都学士山岳会）の誕生をみた。

最初の目標はシッキムのカプルーだったが、満洲事変に妨げられて実現せず、方向をかえて樺太の山に登った。これがその後につづく遠征登山のきっかけとなり、南北千島から朝鮮に移って、一九三四年十二月から一九三五年一月へかけての白頭山冬季遠征となる。AACKの主権にかかる最初の遠征であつた。しかしAACKとしてはあくまで初志を貫くべく、伊藤憲をインドに派遣して、カラコラム入りをねらっていたのだが、

戦争がはじまり戦線は拡大するばかりで、ヒマラヤ遠征を実現しないうちに、ついに開店休業を余儀なくされてしまった。

ヒマラヤは閉ざされていたけれども、この期間にAACKの会員は、白頭山に引きつづき、大興安

嶺、小興安嶺、蒙古草原と、休むひまなく遠征をくりかえし、くりひろげていた。AACKの主権でなくても、この人たちがのこした広汎にわたる足跡は、いつかは誰れかによって、認められねばならないであろう。この期間にこの方面で活躍した会員のリストをつくれば、その数はすくなくも三十名をくだるまい（マナスルの今西寿雄だって、冬の樺太と夏の蒙古に

可をとりつけたFFからJACへ委譲された。ところでこれでは納まらぬのが再建されたAACKである。そのエネルギーが爆発して、一九五三年のアンナプルナ遠征となった。AACKの宿願はついに実現をみるに至った。登頂は成らなかったけれども、あの困難な状況下で一名の犠牲者も出さずになしおえた退却は、高く評価されるべきである。

終戦とともにAACKのこの大陸時代は幕をとちた。満洲も蒙古もいつまでも一度訪れることができるであろうか。しかるにいままで閉ざされていたヒマラヤの門戸が、反対に開かれそうになってきた。こんどわれわれに火をつけたのは、いうまでもなくエルツォーグのアンナプルナである。ネパールをやる、ネパールならおもしろいにちがいない。この計画の母体として新たにFF（京大生物誌研究会）が生まれた。

しかしネパールへはいった西堀栄三郎から、学術をおろして登山を看板にかがげるといつてきた。そこで開店休業していたAACKを再建することになり、京大山岳部の若手を補充することによって

その強化をはかったが、衆知のごとく結局マナスル計画は、入国許

っているということができた。また戦後になって、どこかへ遠征に出かけたことのある会員の数も、いまではゆうに三十名を突破するに至った。

三十年を記念してAACKも昨年、社団法人として新発足した。この点ではJACに見習うものであるけれども、JACほどのオープン・システムでもなく、そうかといって学校山岳部や地域的職域的な山岳会ほどのクローズド・システムでもない。はじめに断つように、京大のOBを中心とはしているが、二百名をこえる会員の約一割は京大卒ではない。また京大卒といっても、山岳部出身者ばかりでなく探検部出身その他が含まれる。AACKのヴァイタリティーは、案外この不純な雑種性によるのかもしれない。

（一九六一・一・二）

△編集部宛てて▽

◇御註文の会報原稿をおとけします。なにぶん私はAACKとともにこの三十年間をくらしってきたようなもので、書けばいくらでも書くことがあるのですが、みなさんの大切な会報の限られたスペース内では、こんなことでお茶を濁すしか仕方ありません。ではこれでお許し願います。

今西 錦司

ノーマン・ハーディ

成瀬 岩雄

既に夏以前から来日の希望を伝えて来ていたし、それに先年松方さんが渡瀨の節、彼と会はれた時「マナスル」の英文欄や行動表を克明に耽読していたと云う事も聞いていたので、十二月六日羽田到着の其夜に逸早く「マナスル」の連中は是非会いたいものだとの希望が出た時には此方もおのづから、既に永年の知己たる「ヒマラヤの友」を迎えたと云う様な親近感を抱かされたのだった。

その著書「Highest Nepal」を読んだだけでも好感を持ってそんな人物だとは思っていたものの、若い連中に囲まれて日本の装備について色々の説明を求めたり求められたりしている状況や、近藤、榎松方、三田の諸先輩を加えてマナスルの連中を中心にした歓迎会で談笑する様を見ては「In Highest Nepal」の何頁かを思出さざるを得なかった。

殊にこの会に錦上添花をそえたのは八拾才を遙かに越えられて猶、壮健、その若き日にはエベレスト登山隊への参加を申出られた事迄あったと云う近藤さんが態々出席された事だった。

宴酣にして、隣席の松方さんが「近藤さんはフレッシフィールドを迎えただけからね！」と僕に耳語かれた時には期せずして二人共一献を酌み交はす近藤、ハーディの両氏の方に顔を向けてしまっていた。

その昔、此処に其の人、其の山ありと世に知らしめた「ラウンド・カンチエンジュンガ」の著者フレッシフィールドを大川端の料亭に迎えた一人の近藤さんが今、その実際の頂を踏んだ御本人と我々の前で膝を交えて談笑する等と云うのは「正に天下の美観に過ぐるものなし」と云う風景だらう。当の御本人も全く予期せざる奇縁に喜びの口吻を洩らしていたとは松方さんの後日談でもあった。

Norman Hardie

ナスルとヘンダーソン夫妻とは切っても切れぬ御縁でもあるので、特に英訳をも附した「有朋自遠方来不亦楽哉」の古語をしたため、出席者一同サインのクリスマスカードをロンドンの同夫妻宛に送りお互いにカンチ、マナスルの思い出を新たにしたのであった。

初めての対面でいきなりこの古語を持出すのは如何うかと思うけど実質的には僕みたいな漢学等には凡そ日頃疎い者でも即座にこの古語を思出させる程の親密感を抱かざるを得なかったと云うのが正直の処だった。

今度の場合は何分滞京期間も短かく本当なら何処かの山小舎で焚火でも囲んで話し合ったらなおあの「In Highest Nepal」の著者ならきつと喜んだかも知れないし、又彼の望む所であった様な気がしないでもない。それでも、後日、ニュージールランドの最高峰に迎える女流登山家数名と富士山には登ったものの、折角の遠来の日本女流登山家を、相当高級な技術を要する自国の氷河の山に迎えて万一間違いがあってはとの懸念から、唯「フジヤマ」に対する興味以外に迎える側の責任感から富士山に行を共にしたと云う、その行届いた親切心には、当の遠征計画当事者以外の我々としても敬意を表せざるを得なかった。

我々山仲間との会合の他に他に彼の専門とする建築学については清水組が彼の研究資料について寛容な態度を以て率先好意ある援助を示され、しかも之がナンダコッタ登頂者浜野君の指示によるものである事を知った彼の喜びと感謝の態は僕等その道の門外漢にもよく判る程だった。

仄聞する処によれば耐震建築については我國も地勢が世界的權威の由。ニュージールランド辺りの学者にして見れば研究の対照となるのも当然の事だから、次回はこの目的のために再度来日の実現性なきにしても非ずとの事、我々も勿論之を期して止まぬ処だ。

(一九六一・一・八)
(サインはルーム日誌から転載)

ノーマン・ハーディ氏

滞日のあらまし

ノーマン・ハーディ氏は、ヒラリー卿の雪男探検隊に参加の後ニュージールランドに帰国の途次を十二月六日に来日。滞在中、十二月二十八日にニュージールランドに出発した日本ニュージールランド女子親善隊の佐藤テル女史等と富士山に登り、十二月十三日はルームにて、クック山のスライドを、十二月十五日には、国際文化会館にて、本会と共催の「カンチエンジュンガ一九五五年」の講演とスライドを、翌十六日には有志懇談会に出席。本会ヒマラヤ関係者と種々交歓討議をした。十七日離日、此の間多忙な日程の中でも、彼は本職の建築家として、東京の建造物、作業場を浜野理事(清水建設勤務)の案内でよく調査して帰られた。

懇談会出席者、近藤茂、榎三田、松方、成瀬、交野、浜野、折井、金坂、小原、辰沼、村木、松田、大塚、石坂、竹田、山野井佐藤テル、以上十八名。

(折井健一)

業務のため来日を機会に、本会ルームを訪れ、日高会長、三田副会長はじめ海外遠征の経験を持つ若い会員と交歓した。韓国山岳会ではアラスカの山に登山隊を派遣したい意向があるとのこと。同氏持参の済州島の山その他のスライドの映写あり。特に同氏が登山について私淑していた田部重治名誉会員とも会談し、二月十七日、帰国された。

(折井健一)

ピエロ・ギリオーネ氏逝く

吉 沢

一 郎



山下一夫氏作

世界の山々を股にかけて歩き、且又登り廻った、七七才の青年登山家、彼も遂に、この世を去った。

× × ×

第二次世界大戦の勃発しようとしていた一九三九年の春の頃だったか、日本を訪れ、当時虎ノ門にあった日本山岳会の事務所に突然現われた。小さな、真黒な、風雪に鍛えたあのシワだらけの顔のギリオーネに、これ又偶然に会ったのが、その日会員としては一人だけしか在室していなかったこの私だったのである。

それから彼の泊っていた帝国ホテルの狭い一室に案内されて軍隊の動員のことなどでたずねられたがこちらはそんなことについては何も知らないのので、返答のしようもなかった。トリノはポロ紙の特派記者であつた彼にしてみれば、山の話も大事だったかも知れないが、寧ろ目的は戦争情報の入手にあつたのであろう。(この時彼は穂高と富士山に登っている)

その後手紙の往復でブロード・ピークへの遠征を計画し、私は会社(當時は日本団体生命)の許可まで得ていたのであるが、ドイツのポーランド突入で総てははかない夢と消えてしまった。あの当時に行つておれば、最初の八千メートルはわれわれのものになつていたかも知れないのである。

その後、アンデスその他の地域からよく手紙をく

七月十五日にイタリアを出発し、北西グリーンランド(北緯七一度―七三度の間)に向い、登山的には殆んど未知の土地であるこの地域で四つの処女峰に登った。この内の三三〇メートル峰登頂には十八時間を要したという。八月の終りに帰国。因みに一九五八年に行ったスイス、フランス合同隊は六五度付近にある Stikertoppen に登っている。(註・この記事は同誌十月号参照)

われわれはこの信頼すべき協力者から世界最大の島への山行物語(写真と地図一枚添付)を受取ったばかりで、これが遂に彼の最後の寄稿となろうとは夢思わなかった。逆説的ではあるが、彼にとっては情熱に溢れた青年時代でしかないこの年でその生涯を終えたことは何としても胸迫る思いがする。われわれの共感と畏敬はやがて彼からの最後の便りを来春三月の特別号に発表させて貰う筈。

故人は多くの山岳会の会員になっているが、スイス山岳会(CAS)ではモンテ・ローザ支部に属していた。

× × ×

ギリオーネは彼からの手紙によると、一八八三年四月五日、イタリアはNevata地区(ミラノの西、モンテ・ローザの南東に当る)にある Borgomero に生れた。

富士山頂気象観測所 所員疲労調査報告書

日本山岳会研究部

・期日 昭和35年8月6日

昭和35年8月26日

・被検者 観測所員(男子) 6名
・調査項目

疲労測定には極めて数多くの方法があるが未だ単一なもので決定的方法はない。従つてこの場合は酸素不足の環境にある生体の消長を多面的に各分野から測定して総合的にこれを判定出来る項目を選んだ。

- 一、脈搏数 二、呼吸数
- 三、血圧(最高・最低)
- 四、唾液pH 五、尿中ウロビリノーゲン及ビリルビン定量
- 六、運動負荷心電図
- 七、自覚症による疲労調査
- 八、性格調査

・調査成績(図表省略します。)

- 一、脈搏 登頂後数日にして増加の傾向にある(図一)
- 二、呼吸 登頂後数日にして減少の傾向にある(図二)
- 三、血圧 登頂後一週間目より最高圧・最低圧共に上昇の傾向にある(図三)
- 四、唾液pH 特に著変をみずと生体内には多少の変化が起き

これを極力少なくしようとする努力が払われる、この努力によつて生体の一時的変化は元にかえる、この能力を生体の適応作用という)

- 二、以後は比較的安定状態を維持するが漸次悪化の傾向を示す(順化現象―環境のある程度の変動が長期にわたると、適応作用が弱まり新しい環境に対する内部環境の恒常性が成立し生体が最初に持っていた限度に変化がおこり、新しい限度が成立する。これが順化である。しかしこの新しい限度を越える時は、生体は失調をきたして衰退を起す)

- 三、環境条件(最高・最低気温湿度)と循環系との間には相関するものの如く考えられる。(図四)

- 四、登頂後五日目及び十日目以後に赤血球崩壊現象がうかがわれる。

- 五、頂上滞在中脈搏の漸増・呼吸数の漸減をみるがその原因については血圧の変動と併せて更に研究の必要あり。

- 六、自覚症状は一般登山者に比べて良好である。

- 七、性格は一般に平均しているが比較的神経質の傾向がある
- 五、尿中ウロビリノーゲン 登

れていたが、私にはよくわからなかった五千メートル級の山の初登頂のことが克明に書かれてあったのを覚えている。然しギリオーネの山の高度はいつも実際(?)よりも高過ぎていたようである。

× × × × ×
ところで最近ついた月刊「Die Alpen」の十一月号に、このギリオーネの死が報ぜられているのをみて驚くと同時に、それが山での遭難でなく、自動車事故によるものであることを読み知って全く残念に思っている。

一九六一年度の「山日記」の九二頁にも私は彼のルーウェンゾリーのことにについて一寸触れておいたが、今彼の死を知ったのを機会に、私が知っている範囲での彼の一代記を書いておきたいと思う。細かい点については又別の機会を持ちたい。

× × × × ×
前記「ディ・アルペン」の十一月号には次の様にかいてある。

われわれは十月十五日付の新聞で、驚くべき登山家であり、探検家であり、ジャーナリストであり、その他、何々である技師P・ギリオーネ長逝のニュースを知った。原因は自動車事故である。(註・別の記事には、十月九日、トレントで開かれた映画祭に出席し、その帰途自動車の衝突事故で重傷をうけ、入院数日にして死亡した。享年七十七才とある)

この年の一月二十五日に、ガイドのC・マウリとB・フェラリオを伴い、コンゴ側奥の処女壁(西壁)直登を行い、ルーウェンゾリーのアレキサンドラ峰の上でその高さを祝った。(註・「ディ・アルペン」三月号参照)若い者はだしのこの疲れを知らぬ野心的なギリオーネは、次には彼が隊長になってグリーンランドに遠征した。

山行の主なものは一九一三年のカズベク(コーカサス)から始まり、カラコルム、ヒマラヤ、日本アルプス、台湾、ボルネオ、アフリカ三山群、オガール、豪州、ニュー・ジブラント、パタゴニア、アンデスの殆んど全域、メキシコ、ハワイ、アゾレス、北米、アルプス、コルシカ、ブルガリア、スコットランド、チェコ、ノルウェー、フィンランド、スピッツベルゲン、スペイン、アルバニアその他となっている。登山家であんなに広く歩いたり登ったりしている人が世界にあるであろうか。全く呆れた人である。

× × × × ×
次にその著書の主なものを。

Dalle Ande all'Himalaya, Torino, 1936

Le mie scalate nei cinque continenti, Milano, 1942

1942

Karakorâm (Himalaya), Novara, 1946

Monte Bianco, Novara, 1946

Nelle Ande del Perù, Milano, 1953

Eroismo e tragedia sul Monte Api (Nepal), Milano, 1954

Dall' Artico all'Antartico, Torino, 1959

この最後の本は彼の旅行並びに冒険の概略の集大成で、トリノにあるS.E.I. (Società Editrice Internazionale) から、私の前住所大阪高槻市に発送されて、それから六〇年二月七日に現住所へ転送されて来たものである。

ギリオーネは前にもOmaggio A Piero Ghiglione (con elenco delle sue principali ascensioni e delle sue pubblicazioni) Milano, 1958 というパンフレットを送って来たが、これは地域別、年代別によるギリオーネの登った山の一覧表である。

(三五・一一・三一記)

頂時増加し(一例を除く)後消失、一週間目から再び漸増する(表一)
尿中ビリルビン 全期間を通じて陰性

六、運動負荷心電図 特に変化を認めないがT波の僅かな増高あり

七、自覚症による疲労調査

循環器症状 一・二%

呼吸器症状 八・二%

消化器症状 一・二%

眼症状 〇%

耳症状 一・〇%

新陳代謝症状 二・〇%

骨筋肉症状 五・五%

泌尿器症状 〇%

精神・神経系症状 三・八%

八、性格調査

循環性氣質 36

粘性性質 38

神経質 40

分裂氣質 39

ヒステリー性格 36

・考察

一、登頂後五日目〜七日目に身体的変調を来す。

(適応作用) 生体は特殊な機構で環境のある程度までの変動による影響を全く受けけない。これが人間の限度である。環境の変動がこの限度をわずかに越える

・総括

頂上滞在廿日間の経過は初期の一週間に身体的変動を来し、以後安定化するが漸次僅かつつ増悪する傾向にある。
今回は全般的な傾向を調査したのであって時に初回の事でもあるから観血的試験を遠慮したが次回には血液の分析によって潜在期間の決定も可能と考える。

(辰沼広吉)

編集の都合で添付の図・表は省略しました。



高橋定昌氏作

昭和三十六年度会員総会

◇四月二十二日(土)午後二時

◇場所、体協会議室

新版5万分1地形図 の 話



西村 蹊 二

登山用のベースマップとして代表的な建設省国土地理院発行の5万分1地形図について、最近二つの話題がもち上つてゐる。

一つはやゝ旧聞に属するが、登山ブームによる入山者の激増や山岳地帯の開発等にもなつて今迄正確無比といわれていたこの地形図に誤りのあることがしばしば指摘されたこと、もう一つは昭和29年頃から急激に発達した写真測量によつて、これらの地形図が次々と書きかえられたことである。

この二つの話題について新版と旧版を比較しながら地形図によつて登山される方々のために、簡単に説明して見たいと思う。

新版5万分1地形図が発行される迄。

国土地理院の前身が陸地測量部であることは、ちょっと古い登山家の方なら御承知の筈である。この陸地測量部は昭和20年終戦と

もに解体したが、間もなく内務省に地理調査所が設立された。

その後地理調査所は建設省に移管され、更に三十五年の四月から国土地理院と改称された。

最初に5万分1地形図が測量されたのは明治21年といわれ、それ以来約30年間で日本全土の測量が完了した。その後は経年変化による修正測量を主として行つていたが、この事業は終戦後も続けられた。「陸測」の5万分1地形図はもっぱら軍用に作成されてきたからその内容もすべて軍事作戦用のものであった。戦争の激しかった頃にはこれらの地形図は取扱いがやかましくなつて印鑑を持参して署名捺印しないと買えないこともあった。

終戦後はしばらく空白の状態にあったけれども、時代が落着くとともに、地形図の利用目的がかわつてきた。地形図の内容は軍用から国土総合開発計画、森林開発、農地改革等の平和産業用に変える必要があつたのである。

一方昭和28年には民間航空会社の手による空中写真の撮影が可能になり、又この頃からドイッ、或はスイス製の写真測量用図化機が次々と輸入されるようになり、日本の写真測量は理論から実用化の段階へと発展した。

国土地理院ではこのような状況を考慮して、昭和30年に5万分1地形図図式規定（地形図を作成するために必要な表現内容、方法等に関する規定）を新たに制定した（これ迄の図式は大正6年のものを使用していた）。この規定による新版5万分1地形図の作成は、平和産業への利用を目的としたものであり、実施にあつては写真測量の技術に負う所が少くない。

2 等高線について

登山用地形図で等高線のもつ役割は大きい。奥深い山岳地帯に入れば、目標になる物体が極端に少なくなるから、等高線によつて表現された地形をたよりに行動しなればならないことが多い。等高線による地形表現に関しては新版は旧版に比してはるかによい。新版は空中写真によつて描かれ、旧版は平板測量によつて描かれているからである。

平板測量による等高線は、一般に観察し得る範囲内において先づ基準になる尾根、谷等の著名な点の位置と高さを測定しこれをもとにして現地と対照しつゝ挿入法によつて描いたものである。即ち数学的基礎に立った一種のデッサンである。この方法は特に尾根と谷の関係を明示することを重視しているから、この場合の等高線は幾

何学的等高線と云ふよりはむしろ地形を表わすための地形曲線といえよう。この方法の欠点は、莫大な日数、労力或は特殊な技能を必要とするだけでなく、特に山岳地帯や密林地帯における測量が困難なことと、精度が落ちることである。したがつて平板測量による旧版の地形図中で、山岳地帯の地形表現に不備な点がしばしば発見されるのは、当時の事情から考へてむしろ当然といふべきであらう。

これに対して写真測量は、これらの平板測量の欠点の大部分を除くことができる。真上から撮影した空中写真を使用するから、平板測量を行う場合に比して、見えない部分がはるかに少く測量に大きな誤りがない。更に測量の方法は挿入法ではなくて、等高線を一本一本直接に測定する方法によつてゐるから、原理的に幾何学的な等高線を描くことも可能である。

それだけでなく、殆んど現地作業を行う必要がないこと、大部分室内で作業ができること、作業日数が著しく減少したことも写真測量の大きな特長である。これらのことを考え合せると、写真測量による新版図の等高線に関しては大きな誤りは殆んどないといえる。

3 等高線の簡略化について
測量方法の他に等高線に関する

もう一つの問題は、等高線の形を如何に簡略化するかということである。平板測量による等高線は或る意味で極端に簡略化した等高線、写真測量による等高線のそのまゝの形は全く簡略化を行わない等高線といふことができるが、前者は地形の状況をくわしく知ることができないし、後者は図が複雑過ぎて読図しにくい。それ故地形図の等高線には、合理的な多少の簡略化を行うことが必要である。

旧版の地形図の等高線から、すぐれた地形表現を望むことは無理であるが、写真測量によつて描かれた等高線からはすぐれた地形表現をすることは可能な筈である。

しかし既に発行された新版図は隣図との接合、簡略化の研究不足等のために簡略化しすぎてよりすぐれた地形表現ができてゐるとはいえない。すぐれた地形表現を行なうためには測量方法の改善だけでなく、地形表現法に関する十分な研究が必要なのである。

4 図式について

新旧版の地形図の内容について主な相違を上げてみよう。

1 投影法が多面体投影から横メルカトル投影になった他、図郭の経緯度の端数10秒4をとつた（この投影法によれば地形図は何枚でもつなぐことができる。たゞ

新版「立山」図葉の一部

(昭和34年発行写真測量による全面修正版)

挿図の「新版図」は三色刷発行図の原版を重ね刷りして一色としたもの。



旧版「立山」図葉の一部

(昭和27年応急修正版)



1:75,000 (1:50,000 の縮図)

し、当分の間この両方のどちらの投影法を用いてもよいという暫定的な処置がとられることになるから、この切かえが完全に完了するのは尚数年はかかる。2 印刷の色数は一色刷から三色刷（等高線は褐色、水部は青色、其の他は黒色）となった。3 道路は国、府、県道等は記号を廃止して注記して表わし、道路記号はすべて道巾で分類し、舗装部の記号を新しく作った。4 鉄道は、単、複線の記号の他に国・私鉄の記号を新しく作った。5 万年雪の記号を新しく作った。

これらのうちで登山用として特に便利になった点は、印刷の色数を増したことによって、読図が容易になったこと（例えば深い谷では川の色を青、等高線の色を褐色にしただけでも、かなり図が鮮明になる）万年雪の記号を入れることによつて夏期の残雪状態を知ることができるようになったこと等があげられる。

しかし、国土地理院は国家機関であるために、新版地形図は多目的に作成されているので、登山用マップとしては、尚不十分な点が多い。例えば、登山道でも、季節的に使用できるもの、踏跡、等が記入されている方が便利だし、又バス道、キャンプ場、水場等の

記号もほしい。国土地理院では特に最近の登山ブームを考慮して、新版図を基礎にして、これらの記号を補入した登山用マップの発行計画を進めている。この図は地形図を何枚か貼り合せて使用するような不便をなくした地域別的大型マップで、登山口から目的地迄が一枚の紙におさまるようになっていく。

5 新版図について
新版図は写真測量によって全面書き直したものと、要部修正程度の修正をした図に昭和30年図式を適用しただけのものの二種類があるが、後者は殆んど山岳地帯を含んでいないのでこゝでは省略する。写真測量によって全面修正された新版図第一号は、昭和34年発行の立山、黒部、五百石の三図葉である。これらの図はステレオトープという最新式の機械で図化されたものであるが、その結果の一部は上の二つの図に示す通りである。

これによれば、新版は旧版に比して地形表現が細く、地形の特長をよくとらえているほか、崖記号による読図困難な個所がかなり取除かれていたことが知られる。これらの具体的な例として、1 山崎カール、立山と浄土山の間の称名川源流部、御山谷源流部等における永蝕地形が新版ではよく表現されていること、2 立山川上流部に最近の登山ブームを考慮して、新版図を基礎にして、これらの記号を補入した登山用マップの発行計画を進めている。この図は地形図を何枚か貼り合せて使用するような不便をなくした地域別的大型マップで、登山口から目的地迄が一枚の紙におさまるようになっていく。

これら三図案の次に発行されたものには日光附近の6図葉、谷川岳の入る四万、北アルプス、白馬岳等があり、既に測量を完了したもので発行途上にあるものに、谷川岳附近3図葉、立山に続く北アルプス地区の11図葉等がある。箱根付近の4図葉は新版であるが写真測量によって一部修正しただけである。

尚この他に、写真測量で等高線の一部修正したものに南アルプス6図葉、八ヶ岳の一部等がある。これらの地形図の発行状況を見ると意外に少いことがわかるが、それは日時が浅いことや、これらの地域が大起伏の山岳地帯に相当し、技術的に困難な問題を含んでいること等のためである。

しかしこゝ数年のうちに主な山岳地帯の新版図が発行されることは間違いないようである。

(筆者は建設省国土地理院
測図部勤務)

年次晩餐会の記

織内信彦

年次晩餐会の行われた十二月六日は、木枯しが吹き底冷えのするいかにも冬らしい夜であった。それでも、ほど定刻には会場である茗溪会館には続々と会員がつめかけ、予備室にあてられたサロンは寛く席もないほどであった。いつものことながら、この年次晩餐会や有志晩餐会などを年に一、二度の楽しみとして欠かさず列席される古い会員、大先輩の顔がずらりと居並ぶ会場風景は、いかにも日本山岳会らしい壮観と言ってもよいように思われた。

折井理事が開会の言葉を述べたあと、当日の司会を指名された藤島敏男氏が大変手ぎわよく進行の努をとられたため、七十二名にも及ぶ多勢の会合でありながら、きわめて静かに、それでいて和気あいあいとした空気のなかで、時にはテーブルスピーチを聞きながらときには熱いスーブをすくりにながら時のたつのを忘れるほどであったことは、参加者の一人として何より嬉しく思ったことであった。

十一月に起った富士山の雪崩のアクシデントについて「なぜもっと慎重な登山がやれないのか、子

をもつ母親の立場から訴えたい」と述べられた村井米子さんの話は短い言葉のなかではあるが、今日の登山界の弱点を卒直についた警句として、肯綮に備いすべきものであったと思うが、それを受けた村木氏が「山はどこを登っても危険なので、安全な山登りの限界などは考えられない」という意味をのべられたのは、おそらくは、その場におけるユウモアとしてではあったろうが、いさゝか氣に残るところであった。

深田久弥氏がスイスアルプスに於ける最近の遭難統計を引例してスイスでは若い青年の遭難が少く中年以上から五十才以上、八十八才の遭難者もいる、という話をしたのは、大変面白く聞かされた。そして、我が国の遭難事件もスイスのようにもっと年寄り組に起つたら愉快である。例えば「山岳会の日高会長北アルプスで遭難」などという新聞記事が出たら大変愉快ではないか、と言われるに至ってテーブルのあちこちから控えた目ではあるが和やかな拍手が起った。

大阪から他の会合を断って駆けつけたという篠田軍治氏が最後に昨年ボストンへ行ってアメリカ山岳会(AAC)のメンバーに会おうと思った、あいにくアニュアルディナーの日につかって誰に

も逢えなかった。という言葉の示唆のなかには、JACの年次晩餐会ももっと多くの会員が集ってもよいのではないか、というようにうかざれたのは私ひとりではないであろう。少くとも役員の人達はもっと出てこなければいけないと思うし、若い会員の連中も積極的に出て来てほしいと私は感じた。

マ出席者氏名

岩永信雄、茶谷東海、山口一孝、徳久球雄、藤島敏男、日高信六郎、小里頼忠、武藤晃、冠松次郎、竹節作太、近藤茂吉、古市美津雄、榎有恒、芳野起夫、折井健一、岡埜徳之助、木下是雄、高木菊三郎、川喜田二郎、松本熊次郎、織内信彦、金沢守恭、小野利次、武田英男、篠原敏弘、鶴岡元之助、小方全弘、原田幹市、齊藤清太郎、吉田竹志、鳥山悌成、諸岡一次、中村謙、永井清一、C・Bボーデン初見一雄、高橋進、仲保、米田文郎、望月達夫、奥井清、西丸震哉、村木潤次郎、小原勝郎、佐藤久一朗、三田幸夫、田辺主計、森本智津子、深田久弥、工学院大学山岳部(赤堀忠義、阪本英敬)渡辺操、小泉満、加藤泰安、入沢文明、外山義夫、古沢肇、木村碩志、網蔵志朗、田村扇一、桜井信雄、西郷正郎、村井米子、石原憲治、吉武正子、浜野正男、加藤元一、

島田史朗、川森左智子、沼倉寛二郎、斉藤健治、篠田軍治、以上七十二名。

カンナ大佐の離日

かねてより当会と親交のあつかった駐日印度大使館付武官、A・N・カンナ大佐(Colonel, A. N. Kannan)は四年の任期をおえて、十一月二十九日、東京駅発、十二月二日、神戸港より帰国された。これに先立ち本会では有志により送別会を行った。

日時、十一月十六日、午後六時・場所、代々木、日本郵船クラブ・出席者、A・N・カンナ大佐、榎、松方、三田、成瀬、辰沼、村木、丹部、松田、夫君に劣らずわれわれに好意を示された夫人は出発後であった為、出席願えなかったのは残念であった。

×

大佐は四年前来日いらい本会と会員のヒマラヤ登山に多大の声援と援助を与えられ、本国の各方面と連絡して便宜をはかり、たびたび会員を茶会に招待された。大佐と同期のギャン・シン代将が主宰するダージリン所在ヒマラヤン・マウンテン・アライヴ・イン・スチット(インド国立登山学校)と本会との間を斡旋したのも大佐であ

り、おかげで両者の親密な関係が開かれたものである。(会報二〇一号参照)同氏のアビ登山隊、デオチバ登山隊等印度国内での登山または通過した隊に対しつくされた絶大なる好意を忘れることはできない。

本会もいろいろな機会に大佐を招いていたが、出発に際し同氏の当会に尽された功績に感謝する意味で、日高会長から記念品(七宝の煙草セット)を贈って謝意を表した。

同氏から本会に対し、白檀製のタジマールの印度彫刻を施した木箱が記念に贈られた。現品は本会ルームに保存してある。

なお後任には、十一月二十六日付を以て、C・S・メータ大佐(Colonel, C. S. Mehta)が着任され、カンナ大佐から会員に紹介された。

(松田雄一)



山下一夫氏作

第十六回国民体育大会

秋田会場試走記

藤 島 玄

遠望では尖鋭な峰頭をもたげる秋田駒ガ岳も、一三二〇Mの日笠鉾山跡に特発のバスを下りると、両肩の緑衣から赤褐色の岩肌をむきだしにした複雑と重厚さの正面を見せる。硫黄採掘跡を伝って一時間たらずで阿弥陀池へ出るが手前の湿地から駒ガ岳の東斜面を登ると、高山植物が出揃っているがもう葉は黄ばんで実のみが赤い。

一等三角点一六三七Mは岩手山の二〇四〇Mには及ばないが附近では群を抜く高度である。

男岳は相対して高さを競う岩峰で頂上の人影が指呼されるほど近い。阿弥陀池から動きだした一行を追うて南斜面を下ればコケモモの実が鱗の目玉のように大きく、リンゴより鮮かな色艶である。

男岳には石祠があって、奉納の石額の駒はエジプトの石壁画のように美しくも愛しかった。

秋田駒ガ岳は奥羽地方の中央部。今年(35年)の国体登山は南端に近い肥後国。三十六年度は北端に近い羽後国。阿蘇がカルデラ

と外輪山にまともまっているのに反して、駒ガ岳・八幡平はコニーデとアスピーテ型からなる連峰である。目路の限りは延々と続く緑の山波は、偉大にして平凡なる山につきるようであるが、とにかく素晴らしい山である。時間と費用のある者は冬滑ればよいし、どっちもない者も駒草を踏んで温泉に入られる。

シネマスコープ型の八幡平の後に八甲田群山、北東に岩手山、北西に遠い岩木山。東の早池峰山と南西の鳥海山は雲表を抜いて一目瞭然である。それに月山、朝日連峰、蔵王群峰と続き、未知の栗駒山、焼石山に私は注目した。

無風、高曇りの初秋の山々は驚くほど遠望が利き、足下の田沢湖の紫碧と黄金の稲田もコントラストが美しかった。栗と赤松の間から田沢湖が見える湖畔の宿の天気祭の感応であるらしい。雲の下に聞く雷族が、御神酒がすぎでガラゴロ鳴ったのも笑止であったが今日は姿をみせない。

横岳へ岩稜を伝って廻ると、E隊(自衛隊無線通信を含む)の行進が砂礫の隆起へ消えてゆく。

本隊も揃った。会社や家庭の時間ではなく、山に合わせた時間で暢気に歩くようになった。砂礫の見渡す限りの斜面は、したたるよ

うな細葉を重ねたコマクサに彩られていたが、花がないため人々は見向きもしないで、等間隔のケルンを辿って行った。

地図では針葉樹林の頂稜を貫通して行くのであらうと想像していたが、踏み行く稜にはアオモリトドマツの姿はなく、膝より低いハイマツ、イチイ、ハイネズ、チシマザサなどの叢樹と、花はもう見られない草原で交互に続く餅の背のように緩いカーブで、道もよく、小径という感じではない。

暢気にかまけて、地図もノートも空白になっているのに今気付いて慌てている。村井正衛君の「八幡平・岩手山・駒ガ岳」を調べてみたが、駒ガ岳、乳頭山間の唯一の水場が記載されてない。日笠鉾山からの登山道が笹森山から真東に折れて合う湯ノ森山の南鞍部一四〇〇M辺であらうか。清冽な沢水が笹原を横断して西へ流れていた。一行が早目の尽食をすまずと隊員は附近の清掃をしていたが、水場である以上、水路を塞ぐ汚物を除くのが第一である。

湯ノ森山の緩登をすぎると、頂稜はますます拡がり、高原散歩の趣きとなり、目を引く高さの山は前の岩手山と後の駒ガ岳だけになり、乳頭温泉群からの若い男女の華やかな色や声が遠くから漂うて

くる。

ゆるやかな起伏のうちに笹森山に近ずいて行くと、水音を立てて歩くような湿原もあり、沼にはミズガシワが浮いている。安山岩の岩塊が露出しているので穴は解るが、アオモリトドマツの森らしいものは全然見あたらない。目を馳せれば乳頭山の間に僅かな疎生をみせ、東傾面にはかなりの森林帯をなしているから、この附近が限界線をなしているのであらう。

東の三角山の間に湿原が黄色く染って見下ろされるが、それが千沼ガ原という池塘群であらう。上限は稜頂に及んでいるから、位置を選んで池を手際よく掘れば、国体の水場として役立つであらう。

針葉樹の疎生にもすぐ離れ、乳頭山の鞍部へ緩降してゆくと、西側は火口壁であらうか、初めて底がのぞかれる地形となって、乳頭山の南面の岩壁が赤褐色に屹立している。地じり状の段丘には曲玉状に連なる沼が光り、鞍部には遭難者の石碑があった。

乳頭山、旧五万分地図にはニュツムリとルビが振ってある。この懐かしい名を知ったのは昭和16年の七月であった。故吉川正次さんと二人旅。第二日は早池峰頂上の小屋泊、第三日午前中に柳沢の岩手

山神社の里宮泊。第四日岩手山午前六時、雨中の泥道を強行して藤七温泉午後五時泊。第五日八幡平より玉川部落泊、第六日国見温泉泊。第七日雨はやんだが濃霧の中の秋田駒であった。駒ガ岳の高山植物より乳頭山という全国にも類例のない山名に心ひかれて今に及んだのである。

板状の安山岩の頂上はラジウスやトランジスターが音立て、短波無電は受信で忙しく、登山道も四通八達である。どこにもある片面断崖の鳥帽子型のこの山は、いつの間にか鳥帽子岳と記載され、ニウトウザンと呼称されるほど平俗化したのが展望台としては低いながらも優秀な位置を占め、乳頭温泉群からの登山者で賑わっている。田代岱山荘のある森林帯へ入る前に振り返ってみた。一度は訪れたいと思い続けた乳頭山は、秋田オバコの胸ほどのふくらみもない小さいうねりで、どこからこのロマンチックの山名が生れたかと思うほど変もなく奇もない。

高山植物は主要なものを四〇種ばかり見たが秋山を飾るタカネマツムシソウの紫花やウラジロナカマドの紅葉がなかった。

ブナ林の中の蟹湯温泉は快く静かであったが、翌朝は雨であった。

(三五・九・二六)

富士の雪崩遭難

山崎 安 治

昨年、富士山の遭難では大変世間をおさわがせした。遭難そのものについては近く報告書を出すことになっているので、いまここで私が個人的な意見を申し述べることはさしひかえたいが、どういうわけか私にはよく理解出来ないのだが、今度の遭難ほどジャーナリズムからデマを飛ばされた遭難事件はこれまでになかったのではないかと思う。そしてそれらの新聞記事をもとに雪崩に対して勝手気ままな推測が下された。これでは全くとまったものではない。どのつまりは早稲田の山岳部というものは、何か神風登山隊の集りみたいにみられたのではないかと思う。とんでもない話である。

識者が、今回の雪崩の検討をされ、批判されるのは、登山界全体のためまことに喜ばしいことであるし、またそうしたものがなければ登山界の進歩というものはないであろう。それだけに責任は重大であり、いいかげんなことは出来ないはずである。早稲田の山岳部を若し批判して下さるのであったら、直接山岳部の責任者からよく

状況をたしかめた上でやっていただきたいと思うのであり、直接あって話もきかず、虚報にみちた新聞記事をもとに批判されるようなことがあったら、その結果はまことに当事者にとっても迷わく至極なものとなることは明白であろう。

休部の問題にしても、早稲田の山岳部が消えてなくなってしまうようにいいふらされているようだが、決して消えてなくなるものでも、解散してしまうわけのものでもない。再建のために若干の期間を設けるということにほかならないのである。

ともあれ、早稲田の学生たちは世間でいわれたように、無茶な企てや、無茶な計画をしていたわけでは決してない私は信じているにもかかわらず、このような雪崩に遭遇した。大自然の恐ろしさをいまさらながら肝に銘じたわけだが、それだけに今日の雪崩はこれまでのわが国の登山界に前例をみなかった様々な複雑な要素をはらんでいるのではないかと考えている。

今回の遭難に際して山梨支部の百瀬舜太郎氏以下の方々をはじめ学生部の諸氏、そのほか多ぜいの方々に非常にお世話になったことをあらためてお礼申し上げたい。



会 員 通 信

上田哲義氏作

開聞岳から

渡 辺 公 平

一九六一年の新春は暖かい南の山で迎えてやろうと大晦日に東京発。元旦は鹿児島経由で指宿温泉に一泊。二日の朝、北麓の開聞岳に登りまから九州最南端の開聞岳に登りました。標高九二四米ですが、駅の高さがせいぜい五、六十米だからほぼ九百米に近い登りであり、休憩時間を入れて二時間余かかりました。

薩摩富士とも呼ばれるように、東北からみるときわめて端正なピラミッドだが、北麓から仰ぐとやや形が崩れる。面白いのは北—東—南—西—北と渦巻状に登路がつけられていることで、円錐形を一周しながら頂上に着くことです。北陸から上信越を襲った豪雪の

影響か、こんな南の山も三合目辺りから雪を踏み、七百米付近から上は立派な冬の山でした。樹氷とまではいかないが、それに近い状態で、大きな岩塊の露出している頂上は風当りも強くちょっと感じが出ました。

快晴だったが南の海上は多少ガス気味で硫黄島らしいものしか見えず、期待した屋久島はダメ。そのかわり池田湖、その彼方の桜島など展望はなかなか楽しいものがありました。

どこへ行っても山登りは盛んで、この日も頂上へ十五、六人は登ってきたでしょうか。みんな若い人たちで、楽しそうです。帰りは川尻に下り開聞温泉に一浴して霧島へ。

ニューギニアから

風見 武秀

御無沙汰しております。小生、目下、西ニューギニアをグルグル廻っておりますが、いよいよ中央雪山山中の未開地といわれるバリウム地区に入ります。オランダ政庁は好意的で、先般も小生のためにユリアナピークの登頂の記録映画等も見せてくれました。未登頂の山はまだありますからどうぞ、と言つてます。帰途ウキッセル湖にも行きたいと思つてます。

北九州支部から

橋 本 三 八

昨年夏八幡市皿倉山で支部集会を開いたとき、次は九重山で集まろうということになっていたのが計らずも私が八幡製鉄がこの秋、七千万円で建設した九重山荘の管理に当ることになったので、これを機会にこの豪華な山荘で周囲の高原の雰囲気ひたりつつ集ることを計画しています。

あまりむずかしい規則などというにとらわれず、気分的な集りを皆希望しているのです、その場所として九重高原の一角に、吉村順三氏の名設計による山荘は、もっとも適していると思い、私もその日のプランを夢に描いて居ります。そのときには本部からもぜひ参加して欲しいと思つて、日高会長にもお誘いしている次第です。

(三六・一・六)

久 住 か ら

加 藤 数 功

十二日から冬の九重に入り、昨日帰ってまいりました。今年はかなり寒く、九重も冬山の感が出ています。来週から祖母山に出かけます。

(三六・一・一七)

ニユージー・

ランド便り

宇田川 允 敏

△その一▽

出発の時は、わざわざお見送り
 ありがとうございます。出発以
 来一ヶ月半を過ぎ、早くも南極に
 ほど近い南緯四十八度のTe Anau
 という所に来ています。恰度上高
 地のような所で、前に湖を持った
 林の中のキャンプ場です。バス旅
 行でテント、しかも冬を張って
 いるのは我々だけ、他は皆自動車
 でトレラーのキャンピングを持って
 来てキャンプしています。それら
 は、電灯やプロパンガスを備えて
 家庭の延長のような感じですが、
 我々のテントはウインパー3人
 用、中はロソクでラジウスとい
 う有様、中に居れば日本の冬山と
 同じ感じで、ニユージーランドに
 来ているとは思えません。

英語のこと、ご心配頂きました
 が、幸い大して不自由もなく過し
 ています。こっちが適当に単語を
 並べれば、相手は聞き取ってくれ
 るし、ゆっくり喋ってくれるので
 大丈夫です。外人の顔も見なれた
 ので、何の気兼ねもなしに英語が
 口から出てきます。ただ一寸苦痛
 なのは、起き抜けの寝呆けまなこ

でも英語を喋らなければならぬ
 ことです。

△その二▽
 Mt. Cook にお目にかかれるの
 は、あと一週間後です。今日、は
 じめて雪が白く光っている山を見
 ました。恋人に会ったときのよう
 な胸のとぎめきをおぼえました。

日本でなら種高でなくとも、美
 しい山は沢山ありますが、ここは
 南島の西側以外に山らしい山はな
 く、岡程度で同じ景色ばかり続い
 ています。上陸以来三週間の平地
 旅行で、牧場と羊の景色も見あき
 てしまい、早く山に入りたいと皆
 でぼやいています。

× × ×

ニユージーランド・アルパイン
 クラブの人に Mt. Cook のことを
 聞いたら、ガイドをつけると云う
 のですが、一日、四千五百円くら
 いなのでガイドレスで行きます。
 Mt. Cook のユースホテルの管
 理人は、有名なハリー・アイア
 ース (Harry Ayres) です。彼に
 会えるのは幸運だし、もしかした
 ら一緒に登れるかも知れません。
 山のことは、またお便りいたしま
 しょう。東京支部の皆様によろし
 くお伝え下さい。
 (一九六〇・一二・一三、西川
 益生あて)

山登りを終りクライストチャー
 チへ戻りました。残念乍ら Mt.
 Cook は最悪の雪と天候のためあ
 きらめて、Mt. Minarets (10,056
 F) Mt. Dela Beche (9,817 F).
 Mt. Dixon (9,800 F) に登った
 だけです。私達は元旦から一週間
 を Mt. Cook へ予定しましたが
 三十一日から気温が急に昇り、普
 通ならば夜中の寒気で、凍る雪も
 凍らず、早朝四時頃でも膝までも
 ぐる程に雪がくさっていました。

私達の入ったハースト・ハット
 (Haast Hut) には、他にも地元元
 の人達が十人程入って、やはり同じ
 Mt. Cook を狙って居りましたが
 彼等もこの雪では仕方なしに私
 達と一緒に Mt. Dixon に登った
 りして気温の下るのを待っていま
 した。Mt. Cook へのルートは私
 達の入ったハースト・ハットから
 Graciter Dome を越え、Dinda
 Gl. をつめて、Zurbruggen Ridge
 へ出てスノーキャップを登って頂
 上へ出るのが最も普通のルートで
 すが、先の様に Dinda Gl. の状
 態が悪く雪崩の危険があり、稜線
 への取付が物凄く急斜面のトラバ
 ースなので、この様な状態では不
 可能とのことでした。他のルート
 は岩登りのルートもありますが、

そこを回るには時間も不足し、長
 い旅行で体力も消耗しているので
 断念しました。

Mt. Cook の麓の Hermitage
 には有名なハリー・アイアース
 (Harry Ayres) が居り彼はユース
 ホテルの管理もしているので私達
 を歓迎してくれました。

Mt. Cook へ登るといので、え
 らく心配しハースト・ハットまで
 一緒に上ってきてカッティングや
 ローピングを教えてくださいました。

ハリーは一見気むづかしそう
 に見えますが、合って見るとなか
 な面白く、四十才ですが私達より
 私達より足が早く、ついて行くの
 にやとてでした。

Mt. Cook はハリーの注意で
 早くあきらめ、正月の二日には下
 におりてしまいました。この日
 から私達が Hermitage を離れる
 六日まで悪天候が続くクックの近
 くで二人の大学生が雪崩にやられ
 て行方不明だと新聞にも出ていま
 した。

ハリー達も飛行機を飛ばした
 り、近くに居る登山者にラジオで
 援助を求めたり大さわぎでした。
 二月二十四日頃に帰京する予定
 です。J.A.C. の諸兄弟姉によろし
 く。(一九六一・一・八、クライ
 ストチャーチにて折井健一宛)
 △編者付記▽ 宇田川允敏氏は東京

支部委員、豊多摩高校OB、日本ニ
 ースホステル協会後援により、ニ
 ースホステル、日本、ニユージーラン
 ド交歓の目的で、昨年十月三十日神
 戸港出発、目下ニユージーランドに
 在り二月下旬帰国の予定。

帰国にあたって

初冬の候皆様には御機嫌良く
 お過しの事とおよろこび申し上げ
 ます。

私共のインドパンジャブ地方遠
 征には温い御支援を賜りありがと
 うございました。

お蔭様にて十一月二十七日全員
 無事に帰国いたしました。

すべてに恵まれデオ・チバ登頂
 の目的を果すことができましたこ
 とは多大の御理解と御援助をいた
 だきましたたまものと感謝ばかり
 でございます。ささやかな体験で
 ございましたがこれを生かして励
 みたいと存じます。

何卒今後ともよろしくお導き下
 さいますようお願い申し上げます
 かしこ

昭和三十五年十二月
 パンジャブ・ヒマラヤ遠征隊

細川 沙多子
 原 欣子
 岡部 ミチ子
 浜中 慶子
 杉浦 耀子
 奥川 雪江



図書紹介

上田哲農氏作

日本山岳全集 第六巻

三田 幸夫 監修
深田 久彌

日本山岳全集と銘うって全十三巻のうち第一回配本として第六巻が出た。「アルプスI」で槍・穂高周辺の明治年間からの珍らしい紀行、記録を集録してある。特に小島鳥水の槍ヶ岳探検記、鶴殿正雄の穂高、槍ヶ岳縦走記をはじめとする探検登山時代のものは貴重である。下って日本にスポーツ的な登山が渡来して以来の数々の先人の貴重な記録がずらりと並んでおり、明治から現代に至る登山の縮図がここに展開されている。特に現在では一般にほとんど入手不可能な「山岳」や「登高行」などからその主要なものを転載したもので、それだけに価値は大きいであらう。

引つづき剣・立山・後立山周辺

南アルプス、中央アルプスなど日本全国の山岳に対してそれぞれこの種のもの企画されており、その発刊が待たれる。(Y)

昭和三十五年十二月朋文堂発行
写真十六頁、本文三九〇頁、三八〇円。

渡良瀬川源流の山

小野 尚俊 著

片品川と渡良瀬川にはさまれ、袈裟丸から皇海を経て白根まで南北につらなる連峰は二千メートルを上して、各方面から眺めると眼につく存在であり、昔は宗教登山の道場になっていたことは山名によってもわかるのだが、その後すっかり閑却されて、たまに登る物ずきを深いヤブで悩んだ。近ごろ地元岳人の努力でみちが開け再び登山者を迎える機運にめぐまれた。

本書はこれらの山を愛好して止まぬ会員小野君が、渡良瀬川の源流を囲む山々を紹介し、実地踏査に基いた詳細な案内と写真や地図それに有益な注意を添えてあり、細かいところまで行きとどいて大変親切に出来ている。(日高記)

B6版、一一〇頁、写真四二、一九六〇年九月、朋文堂発行、マウンテンガイドブックスシリーズ、一三〇円。

高校生登山技術講習会報告書

日本山岳会
登山技術研究会

昭和三十五年八月二日より同六日までの五日間、中央アルプス駒ヶ岳に於て、本会、並びに全国高体連登山部、長野県駒ヶ根市主催で開かれた高校生登山技術講習会の報告書である。タイプ印刷、全文九十七頁、非売品。

はじめに日高会長、北原駒ヶ根市長、土屋全国高体連登山部長のあいさつがあり、装備一覧、参加講師、受講者氏名表、教員パーティー、生徒パーティーの行動概要が示されている。ついで、現地において開かれた受講教員・参加講師による「高校山岳部の諸問題についての反省会」、及び「生徒パーティー反省会の速記録」があり多くの示唆を含んでいる点、傾聴に値するものが多い。

最後にリーダーの講評、参加者全員の感想文がついている。

本書は、今次講習会関係者に配布されたものであるが、高校登山の諸問題をとり上げているので参加者は言うまでもなく、一般にもこれから後の高校生登山指導について重要な資料を提供するものと思われる。遺憾なのは奥付に欠いていることである。(F)

—— 雑誌 合 本 ——

書名	人数	巻数	年 月	発行所
○山岳	129~	Vol 134	34年1月~6月	中日新聞社
○日本山岳会	135~	140	7月~12月	山岳会
○山と	151~	200	33年7月~12月	山岳会
○山と	261~	266	34年1月~6月	山と
○山と	267~	272	33年1月~6月	山と
○山と	228~	230	7月~12月	山と
○山と	231~	234	34年1月~6月	山と
○山と	235~	241	33年3月~6月	山と
○山と	1~	4	7月~12月	山と
○山と	5~	10	34年1月~6月	山と
○山と	11~	16	7月~12月	山と
○山と	17~	22	34年1月~6月	山と

◇寄贈図書(和書)◇ 35年9月~12月

- 山毛 様 叢書 (広島をめぐると谷) 加藤武三 著
- 1 登山とハイキング
- 2 芸北山群
- 3 焚火(随想集)
- 4 スキー・ツアー・コース
- 5 ハイキング 20コース
- 6 広島をめぐると谷
- チリ領バタゴニア、リオ、パケル地区に於ける土地と民生 田中 薫 著
- 山岳関係図書一覧 早大山の会資料部
- 報告 No. 8 京都大学山岳部
- ジュガール・ヒマール 風見武郎 著
- 冬山技術セミナー 金 坂 一 著
- (図書係 徳久珠朗・大橋晋)

マナスル 一九五四~六

日本山岳会編
毎日新聞社刊

昭和三十三年五月二十日発行、本文三五三頁、別に真写、図表、英文梗概付、B5版、定価一三〇〇円、第二次、第三次(完登)の公式報告書。右残部若干あり、希望者には一冊一〇〇〇円、送料本会負担でお頒けしますから、ルームまでお申込下さい。



会務報告

佐藤久一朗氏作

十二月理事会

八日ルム

▽日高会長、松方副会長、理事
浜野、折井、渡辺、金坂、山崎、
古沢、村木、目下田、川上、高橋
田村、徳久、加藤、評議員藤島、
深山、青木、織内、津田関西支部
長、高山信濃支部長、中田富士支
部長、松田雄一
▽議事と報告

①山岳五十五年刊行について

(折井常務理事)

・36年3月刊行の予定

②「山岳」の編集について

(藤島評議員)

・山岳会の仕事のなかで「山岳」
のもつ意味は大きいので編集後継
者を養成することを考えてもらい
たい。
・以前は「山岳」の編集に全理事
が責任をもった。
・マナスル登頂の記録が「山岳」
にのっていないが、載せる必要あ
り。

・「山岳」のなかにヒマラヤの情
報をのせる必要あり。

③「山岳」の総索引(故沼井鉄太
郎氏編)刊行について、目下検討
中
(折井常務理事)

④山日記について

(加藤理事)

・登山の基礎的なものを加えたい
内容については、技術研究委員会
で研究していただきたい。
・山日記の編集全般に亘って、来
年度から新たに再検討したい。
⑤次年度役員改選について

(折井常務理事)

⑥文部省主催、日本山岳協会主催
(日本山岳連盟担当)による登山
指導者講習会(場所富士山)につ
いて報告 (田村・徳久理事)
・期日、十一月十九日―二十二日
・派遣講師、田村、徳久、辰沼、
石島以上四名。
⑦ノーマン・ハーディ氏の講演会
(松方副会長)

・期日、十二月十五日、七時十五
分より、場所、国際文化会館
・演題「カンチエンジュンガとシ
エルパルについて」
⑧ヒマルチュリ登山の経理報告
(松田雄一氏)

⑨海上保安庁、塚本氏より山岳会
あて実体鏡の寄贈を受けた
(徳久理事)

・図書係にて保管する。

一月理事会

十二日ルム

▽理事折井、太田、山崎、金坂、
徳久、加藤、田村、古沢、目下田
川上、評議員神谷、深山、青木、
織内、監事松本、高山、村上(信濃支
部)
▽議事と報告

①第二次登山技術者指導講習会に
ついて(目下田理事)

・西穂高周辺(3月19―25日)

②会の基金を最低五百万円位設定
したい。

・戦前の山岳会には基金があっ
た。何か仕事をするには、必ず必
要である。さしあたり一九六四年
東京オリンピック開催に伴い、体
協事務局が現在敷地内に於て拡張
されることになれば本会ルムを
他に移転することを考える必要あ
り、そのために基金を用意して
おきたい。(神谷評議員他多数)

小集会記録

第二一回十一月十四日(月)

会場 体協二階会議室
議題 雪崩に関するシンポジ
ウム

講師 村木潤次郎氏
金坂一郎氏

明大山岳部 渡辺氏
専修大山岳部 齊藤氏
早大山岳部 成川氏
(東大、慶応は欠席)

×
今回は特に学生部を対象として
過去二年の間に起った、明治大学
の雷鳥沢、専修大学の槍ヶ岳北鎌
沢、早稲田大学の明神岳東稜、日
本大学の穂高湖沢の雪崩事故につ
いて、関係各氏から報告反省が行
われ、つづいて質疑・討論が行わ
れた。

▽出席校及び出席者(校名略記)

上智大、東洋大、青山学院大、東
京薬科大、法政大、学習院大、東
大、電気通信大、明治学院大、早
大、明大、中大、東京女子大、都
立大、国学院大、芝浦工大、千葉
大、日大、千葉医大、専修大、一
橋大、慈恵大、東京電機大、お茶
の水女子大、立大、成蹊大、東京
教育大、各大学山岳部員及び一般
会員、出席者数百八名(高橋進)

小集会の回数の誤りにつき訂正

() 内が正しい回数

第二〇三回(二〇四回) 西北ネパ
ールの旅 川喜多二郎氏

第二〇四回(二〇五回) 雪男探検
隊報告 大塚博美氏

第二〇五回(二〇六回) 南極越冬
の話 村山雅美氏

第二〇六回(二〇七回) ペルー・
アンデス 竹田吉文氏

第二〇七回(二〇八回) 台湾の山
西丸震哉氏

第二〇八回(二〇九回) アラスカ
マッキンレー 交野・吉阪両氏

第二〇九回(二一〇回) ヒマルチ
ユリ登頂(田辺寿氏)、アビ登
頂(津田康祐氏)

東京支部報告

十一月十一日 理事会

①池の平スキー講習会の件

②一月支部集会の件(一月十八
日、ネパールの話とスライド日
高会長) 参加者四十名

③各地域のカラーフィルムを、
資料として備える。

④支部創設十五周年記念行事基
金募集の件

二月一日 理事会

①池の平スキー講習会報告

②二月支部集会の件(二月十五
日、会員のスライドを映写)

③新年度役員推選の件

第一回スキー講習会を終えて

東京支部 安彦 六郎

本年度は第一回スキー講習会を
池の平で行った。

昨年の晩秋頃の予想では、今シ
ーズンもまた、暖冬異変とのこ
とで雪はあやふまれていたが、歳
の瀬になつて列車が止まる程の降
雪があつて、快適な講習を行うこ
とが出来た。よく整備されている
広大なスキー場は、周囲の美しい
山々にとりかこまれて、静かな雰
囲気でいつぱいであつた。

この講習会では一般スキー技術
の他、ツアアの指導を折込んだ。

ツアアをするためには、先ず第一
にスキー場に於て基礎技術をしつ
かりと身につけねばならないから
である。今回は各クラスとも、各
々その技術を習得したように思
う。宿舎の設備もなか／＼良く、
若い人々は屋のスキーと共に、宿
舎のムードをたのしんでいたよう
である。天候もよく、たのしく第
一回講習会を無事終了出来たこと
は、講師各位の御協力のたまもの
にはかならない。厚く感謝します。

講師―安彦、野田、水野、芳野
三枝
参加者、四十五名 以上



高橋定昌氏作

会員の声

本稿は、会員カードの通信欄その他から採録させていただきました。通信を寄せられた会員の方々に感謝するとともに、今後多くの方が会へ通信をお寄せ下さるようお願いいたします。(編者)

大牟田市 馬場 猛

◇海外山岳会の会誌や、山岳書の取次を、山岳会でやっていただけないでしょうか。

会では困難ですから、丸善その他の専門書店へお問合せ下さい。(係)

夕張市 増本 康郎

◇JACの北海道支部がありますか。連絡先、または道岳連との関連性についてお知らせ下さい。

夕張山岳会(会員数30名)がJACに加盟するときの手続をお知らせ下さい。

①北海道支部はありません。したがって②道岳連との関連性もあります。

ん。しかし③札幌には評議員藤井運平氏、同望月達夫氏など住居して居られますから連絡をおとりになるのも良いと思います。(係)

鴻巣市 長谷部 昭久

(日医大CE)

◇体力医学を専攻しています。遭難防止に役立てばと思つてはじめました。今後とも御指導をお願いします。

長野県 井出 佳久男

◇会員名簿が一日も早く出来上るのを待ちます。

鶴岡市 森 茂八

◇鳥海・月山の姿がくつきり聳えています。小生鶴岡山岳会のJAC係をやっています。よろしくお願ひします。

松本市 大和 達郎

◇会報に各支部や、他山岳団体の活動状況ものせられませんか。中央でもう少し技術指導を全国に伸してほしいと思います。地方は独善的になりがちです。

長野県 小松 蒼一

◇竹沢長衛のレリーフ建設にはいろいろと御援助いただきありがとうございます。今後ともよろしくお願ひします。

前橋市 南川 和義

◇学校卒業以来ずっと当地に来て四方を山に囲まれ、小生には恵まれすぎた場所です。ぼつぼつ歩いていきます。

茂原市 佐藤 昭雄

◇地方は指導する人が少ないので中央から指導員を派遣していただけたら地方の山岳会が発展することと思います。

新潟逆巻 吉野 正夫

◇越後支部では今秋(三十五年秋)苗場集中登山をやりました。

高知市 大川 清二

◇四国、または高知に支部を結成していただきたいと思つて居りますが、不可能でしょうか。

仙台市 坂本 雄吉

◇宮城支部も少しずつ建設が進んでいます。問題は若手が少ないことです。JAC自体としても若手が不足なのではないでしょうか。大学の山岳部出身者ももっと社会人の団体に入ってきてリードしてくれるといいと思います。

前衛的な登山ではなく、正統派の登山の前進という面にはやはり大学の連中はたいせつです。御指導願ひします。

大分市 加藤 数功

◇一九六〇年度に私達が主唱いたしました、祖母傾山群の自然保護に対し絶大な御協力を得まして厚く御礼申し上げます。今後とも九州の自然愛護に対し何卒御指導御協力をひとえにお願い申し上げます。

東京都 近藤 隆治

◇小生、福原健治氏と共に道楽で山岳映画を作っております(アルパイン・シネグループ)から、その方でお役に立ちたいと思つています。

東京都 見学 玄

◇一昨年夏朝日連峰に味をしめ、昨夏は飯豊を大日杉から入つて小国に抜けました。楽しい山旅でした。

札幌市 井出 貢夫

◇昨年三月から暮まで、ヨーロッパ、ことにドイツ、スイス、オーストリア、ポーランドを旅行しておりましたので、すべてに大変ごぶさた致しております。

スイスでは、ブラバンドやストイリにも会つて、楽しい時をすごしました。

本号主要目次

(二二二号訂正)

誤 正

●新春の反省……………	一
●AACK三十年の回顧……………	二
●ノーマン・ハーディを 迎えて……………	三
●ピエロ・ギリオーネ氏 逝く……………	四〇五
●富士山頂気象観測所員 疲労調査報告……………	四〇五
●新版5万分地形図の話……………	六
●年次晩餐会の記……………	八
●カンナ大佐の離日……………	八
●第16回国体、秋田会場 試走記……………	九
●富士の雪難遭難……………	〇
◆会員通信……………	〇
開聞岳から……………	〇
ニューギニアから……………	〇
北九州支部から……………	〇
久住から……………	〇
ニュージランド便り……………	〇
帰国ごあいさつ……………	〇
◆図書紹介……………	二
◆会務報告……………	三
◆小集会記事……………	三
雪崩についてのシンボ ジウム……………	三
◆支部便り……………	三
◆会員の声……………	四

編集後記

☆正月の屠蘇気分が発行がおくれ
てしまいました。
☆会報に原稿をお送り下さい。会
員通信も、簡単なもので結構です
からお送り下さい。書評などもと
かく筆者が偏りがちです。全国の
会員に広くお願いできたらと思っ
ています。

昭和三十六年二月二十五日発行

東京都千代田区
神田駿河台四ノ六
社団法人 日本山岳会
編集者 古沢 肇

頒価二十円
電話神田(四)八九五二番
振替口座東京四八二九番

印刷所 株式会社 技報堂
東京都港区赤坂溜池五番地

◆事務室人事異動

本会事務員北河原景寿氏は、一
身上の都合により、一月七日を以
て退職、後任に吉野昇氏が事務員
として就任した。

◆御挨拶

私事今般日本山岳会を退職する
ことになりました。在職四年八月
その間、公私にわたり一方ならぬ
お世話さまに相成り難有厚くお礼
申し上げます。
今後其倍旧の御厚誼を賜りたく
御願申し上げます。

三十六年一月

北河原景寿

神奈川県中郡二宮町二八

富士山頂氣象觀測所 所員疲労調査報告書

日本山岳会研究部

・期日 昭和35年8月6日

昭和35年8月26日

・検被者 觀測所員(男子) 6名

・調査項目

疲労測定には極めて数多くの方法があるが未だ単一なもので決定的方法は無い。従つてこの場合は酸素不足の環境にある生体の消長を多面的に各分野から測定して総合的にこれを判定出来る項目を選んだ。

一、脈搏数 二、呼吸数

三、血圧(最高・最低)

四、唾液pH 五、尿中ウロビリノーゲン及ビリルビン定量

六、運動負荷心電図

七、自覚症による疲労調査

八、性格調査

・調査成績(図表省略します)

一、脈搏 登頂後数日にして増加の傾向にある(図一)

二、呼吸 登頂後数日にして減少の傾向にある(図二)

三、血圧 登頂後一週間目より最高圧・最低圧共に上昇の傾向にある(図三)

四、唾液pH 特に著変をみず

五、尿中ウロビリノーゲン 登

頂時増加し(一例を除く)後消失、一週間目から再び漸増する(表一)

尿中ビリルビン 全期間を通じて陰性

六、運動負荷心電図 特に変化を認めないがT波の僅かな増高あり

七、自覚症による疲労調査

循環系症状

呼吸器症状

消化器症状

眼症状

耳症状

新陳代謝症状

骨筋肉症状

泌尿器症状

精神・神経系症状三・八%

八、性格調査

循環性氣質

粘着性氣質

神経質

分裂氣質

ヒステリー性格

36 39 40 38.36

・考察

一、登頂後五日目〜七日目に身体的変調を来す。

(適応作用)生体は特殊な機構で環境のある程度までの變動による影響を全く受けない。これが人間の限度である。環境の變動がこの限度をわずかに越え

ると生体内には多少の變化が起き

これを極力少なくしようとする努力が払われる、この努力によって生体の一時的變化は元にかえる、この能力を生体の適応作用という)

二、以後は比較的安定状態を維持するが漸次悪化の傾向を示す(順化現象)環境のある程度の変動が長期にわたると、適応作用が弱まり新しい環境に対する内部環境の恒常性が成立し生体が最初に持っていた限度に變化がおこり、新しい限度が成立する。これが順化である。しかしこの新しい限度を越える時は、生体は失調をきたして衰退を起す)

三、環境条件(最高・最低気温湿度)と循環系との間には相關するものの如く考えられる。

(図四)

四、登頂後五日目及び十日目以後に赤血球崩壊現象がうかがわれる。

五、頂上滞在中脈搏の漸増・呼吸数の漸減をみるがその原因については血圧の變動と併せて更に研究の必要あり。

六、自覚症状は一般登山者に比べて良好である。

七、性格は一般に平均しているが比較的神経質の傾向がある

・総括

頂上滞在廿日間の経過は初期の一週間に身体的變動を来し、以後安定化するが漸次僅かつづ増悪する傾向にある。
今回は全般的な傾向を調査したのであつて時に初回の事でもあるから観血的試験を遠慮したが次回には血液の分析によつて滞在期間の決定も可能と考える。
(辰沼広吉)

編集の都合で添付の図・表は省略しました。



高橋定昌氏作